

# 大村国語教室の構造と展開

— 大村はま先生著『国語教室通信』の「学習予定表」をたどつて —

楠 野 義 頭

はじめに

大村はま先生は、昭和五十五年三月、「国語教室通信」(共文社)を刊行された。本書には、年来発行されつづけた「国語教室通信」のうち、昭和四十七・四十八・四十九年度の三年分、計百十二号(第IV巻)と、最近の四年間のもの計九号(第V巻〜第VIII巻)とが選ばれ、収められている。

本稿では、第IV巻の「国語教室通信」(計百十二号)のうち、特に、昭和四十七年度第一期(中学校国語学習入門期)の「学習予定表」をたどることによって、大村国語教室の構造と展開の過程を明らかにしていきたい。

## 一、「国語教室通信」の役割二つ

大村はま先生の「国語教室通信」は、昭和四十年一月九日(昭和三十九年度にあたる)に創刊された週刊(毎土曜日発行)の通信である。この「通信」は、爾来十六年間、大村国語教室の学習活動に重要な役割を果たしてきた。その歩みを、年度別の発行状況によってみると、次のようである。

(年度)	(学年)	(号数)	(巻数)
昭和39年度	第1学年	第1号〜第13号	(I巻)
昭和40年度	第2学年	第14号〜第49号	
昭和41年度	第1学年	第1号〜第41号	(II巻)
昭和42年度	第2学年	第42号〜第79号	
昭和43年度	第3学年	第80号〜第116号	(III巻)
昭和44年度	第1学年	第1号〜第33号	
昭和45年度	第2学年	第1号〜第38号	(IV巻)
昭和46年度	第3学年	第1号〜第38号	
昭和47年度	第1学年	第1号〜第38号	(V巻)
昭和48年度	第2学年	第39号〜第73号	
昭和49年度	第3学年	第74号〜第112号	(VI巻)
昭和50年度	第1学年	第1号〜第40号	
昭和51年度	第2学年	第41号〜第77号	(VII巻)
昭和52年度	第1学年	第1号〜	
昭和53年度	第1号〜	第1号〜	(VIII巻)
昭和54年度	第1号〜	第1号〜	

「国語教室通信」を創刊された事情とその意義について、大村はま先生は、次のように述べていられる。

この年(昭和三十九年度)引用者述、石川台(東京都大田区立

石川台中学校。大村先生は昭和三十五年四月、当校に赴任された。  
一引用者注)で、二回目の一年生を担当した。最初の単元の学習  
の中で、これから国語の学習をしていく間に必要な、学習方法、  
学習能力、その基本的なものを精選して、学習の基礎をおくには、  
どのように進めたらよいか、ということを確認めようと、準備を  
整えて一年生を迎えた。

また、グループ文集や個人文集、学年文集や学習文集など、い  
ろいろの文集を作らせながら、文集のあり方とその作らせ方、使  
い方について研究した。

三学期から「国語教室通信」を週刊で発行した。学習を主体的  
にし、単なる連絡のために授業時間を失わないようにすることが、  
主な目的である。「今日の日まで」大村はま先生稿、「大村はま  
先生教職五十年の歩み」昭和五十二年十一月一日、大村はま先  
生教職五十年記念行事実行委員会発行、六五ペ)

この「国語教室通信」のこと―引用者注) 発刊の動機は、まこ  
とに単純で、時間の儉約のためでありました。べつに聞くことの  
指導の目的を積極的生産的に、明確に持っているわけではない、  
単なる連絡や注意のために国語の時間を割きたくないと思っただ  
けでした。

#### (中略)

ただ、少しでも学習の時間を減らしたくないということから出  
発した通信は、作っていますうちに、だんだん必需品になり、い  
ろいろの意義に気づかせ、価値を発見させてくれました。通信も

作り手の私も育ててくれました。「国語教室通信」まえがき、大  
村はま先生著、昭和五十五年三月十日、共文社刊、一ペ〜二ペ)

当初、連絡時間の儉約を目的として始められた「国語教室通信」  
は、やがて、国語学習の「必需品」として成長し、発展していった。  
それは、偶発的無意図的な発展ではなかった。のちに述べるように、  
「国語教室通信」によって、次の週の学習内容を連絡(提示)する  
ことは、学習者の目的意識を喚起し、学習を主体的なものにするた  
めの基礎を構築することにつながっている。したがって、その成長  
は、創刊年度の授業構想と密接に結びついた必然的な過程であった。  
ここに、「国語教室通信」の果たした役割のひとつを認めることが  
できる。

これを、その時その場に即した短期間の役割とすれば、もうひと  
つの役割は、長期間の授業構想の過程にかかわって見出すことがで  
きる。

昭和四十七年度―四十九年度にわたる第IV巻全百十二号の「国語  
教室通信」の意義について、大村はま先生は、次のように述べてい  
られる。

この一―二枚には、中学校三年間、生徒一人一人、五百時間余  
の国語の時間を何を学習してきたか、その実態、真実が表れてい  
ると思いました。(同上書、一ペ)

「国語教室通信」は、短期間(一週間)の授業構想・学習構想と  
して、国語学習の内容を提示するとともに、一学期間、一年間、さ  
らには中学校三年間の国語科授業の構想過程にそって展開し、その  
足跡を刻んでいく。指導者も、学習者も、ともに、その足跡を確認

しながら、国語科授業を組織していくことができる。足跡(記録)としての「国語教室通信」——ここに、その役割のもうひとつが見出される。

## 二、昭和四十七年度の大村国語教室

昭和四十七年度の国語学習は、大村国語教室において、大きな意味をもつものであった。

大村はま先生の「私の単元学習の歩みメモ」によれば、この年の国語学習は、十の学習・単元によって組織されている。

- (1) 4月 国語学習発表会
- (2) 5月 学習記録の目次作り  
(大村はま先生は、この期間を、中学校国語学習入門「学習準備」期と呼ばれている。)
- (3) 5月 読書生活の記録の作成
- (4) 6月 国語学習記録
- (5) 6月 読書生活の記録の活用
- (6) 10月 A資料を集める
- (7) 11月 B資料を集める
- (8) 11月 どの本を買おうか
- (9) 11月 国語学習発表会(研究発表)
- (10) 11月 ことばの意味と使い方

(私の単元学習の歩み「メモ」大村はま先生稿、昭和五十五年五月三日、大村はま先生退職記念講演会資料、二二二〜二五二)

大村はま先生は、さらに、この年のことを回想されて、次のように述べていられる。

47年度

この年は学習を「実の場」にするという気持ちが一貫していた。

(中略)

。三年間を通して、学習を進めていくことのはじめでもある。

(同上書二二二〜二三三)

ここに述べられた、三年間を通しての「実の場」の構成は、大村はま先生の長年にわたる願いであった。この年を遡る十年前、昭和三十七年十一月二十八日、大村はま先生は、広島大学教育学部光葉会での講演「国語教育の実際」において、「実の場」を構成することの大切さを力説された。

わたくしたちはまず、教える前に、指導計画というものを立てます。どういうふうに進めようかと考えます。まあいろんなふうをするわけですが、いろいろと細かい案やくふうされた案、行きとどいた指導計画、そういうものを拝見することがあって、わたくしは若い方など、ほんとうに綿密な教材研究の上に立っておられると思って感心することがあります。

そこで、そういう案を教室へもっていくことなんですが、いよいよ教室へ行ってみると、なかなかそういうふうにはこばなかつたりすることがたびたびあります。

それは、かんじんなものが、欠けるからではないかと思うんです。子供がほんとうに自分でやる気になってやるときでなければ

ば、進むものでもないし、力がつくものでもないってことは、これは格別新しい考えではなくて、昔からそうだと思うんです。昔から、自分でやる気になったときでなければ、身につかないってことは、わかっています。そういう姿勢を作ることが至難のわざなんです。生徒をしかったり、いろいろしてやっていくのと違います。自分でほんとうに追求したくなるっていう場面をつくると、もしかしてそれができたら、もう、それで先生の仕事はほとんど終わったかもしれないと思うくらいなんです。その姿勢をつくるのができにくいのです。

子供たちも、求める気持ちを持ってますし、いっしょうけんめいやろうとする精神も持ってるんですけれども、なかなか、それを学習に向かう姿勢にすることができないわけです。主体的な学習……、虚の場でなくて実の場での学習とは、つまりほんとうに自分の生活目的のために立ちあがってるような姿勢にもっていくことだと思えます。「実の場」の構成—本気で学習に取り組ませる指導計画を—大村はま先生、「国語通信」(第61号)、昭和三十八年八月十日、筑摩書房発行、六ペ)

大村はま先生にとって、「実の場」とは、学習者が自ら目的をもつて主体的に学習に取り組む「実の場」であり、そうした国語教室を構想し、計画し、組織する「結実の場」であった。このお考えには、大村はま先生の国語教師としてのすべてが傾けられているかの観さえある。

昭和四十七年は、大村はま先生が石川台中学校に赴任されて、五

回目の一年生を担当された年である。しかも、この当時は、第一年から第三学年まで持ちあがることができた。「三年間を通して」主体的な学習を組織することの「はじめでもある」というお言葉にこめられた意味は大きい。

昭和四十七年度—四十九年度の三年間を最後に、大村はま先生が同じ生徒を三年間担当されることはなかった。それを思うと、この三年間は、大村はま先生にとっても、生涯ただ一度の三年間であつたといえるのである。

### 三、学習予定表

昭和四十七年度の大村国語教室の構造と展開を考察するに際して、まず、この年の「国語教室通信」の形態と内容についてみておきたい。

「国語教室通信」は、見開き二面、全六段から構成されており、各段には、毎号、定まった内容の記事が掲載されている。昭和四十七年の記事内容は、次の通りである。

#### ①第一面上・中段

ことは・ことはの生活に関する時の話題

#### ②第一面下段

季節と生活に関係のある漢字・漢語

#### ③第二面上段

今週の文学

#### ④第二面中段

学習の内容・注意事項・その他

## ⑤第二面下段

学習予定表・その他

これは、さらに、大きく三つにまとめることができる。

I ことばに関する記事 (①②)

II 文学・読書に関する記事 (③)

III 国語学習に直接関係する記事 (④⑤)

「国語教室通信」は、ひとつの総合体であり、各記事が相互に深く連絡しあって、「通信」としての役割を担っている。本稿では、その総合性を重視しながらも、特に、Ⅲの記事(中心は「学習予定表」を考察の対象に取りあげる。

その理由は、すでに述べた「国語教室通信」の二つの役割—主体的な国語学習のあり方を指し示しつつ、同時に、その国語学習の記録となる—が、このⅢの記事の中に、集約されているからである。大村はま先生は、Ⅲの記事の中心をなす「学習予定表」について、次のように述べていられる。

二面の下の予定表、A・Bは組ですが、その横の数字は、国語の時間の実際の時数です。年度ごとに数え、学期は変わっても通します。四月の第一時間めは1、80は、四月のはじめから数えて80時間めです。週から週へ、時間数のつづいていないところがあります。それは補欠などでふえたり、体育祭などが、天候のため延期になり、授業のある曜日が変わったたりして予定がちがって来たわけです。(前出「国語教室通信」まえがき、二ページ)

この引用箇所の前半にうかがえるように、「学習予定表」には、

A・B・C・D・Eの各クラスごと

・ 昭和四十七年四月の第一時間目からの通し時間数

・ 学習内容(番号による提示のばあが多い)。

が記述されている。したがって、「学習予定表」は、各クラスの生徒一人一人に、次の週の学習内容と課題を示しながら、各クラスごとの学習の記録ともなっていくという性格を備えている。大村はま先生が、「この一二枚には、中学校三年間、生徒一人一人、五百時間余の時間を何を学習してきたか、その実態、真実が表れている」と言われるのは、「学習予定表」のこうした性格に基づいてのことと思われる。

ただ、「学習予定表」に注目して大村国語教室の構造と展開を考察するばあい、注意しなくてはならないのは、引用箇所の後半に述べられた、「予定」と「実際」の違いである。しかし、この違いは、決して「学習予定表」の価値を損うものではない。ある週の予定変更は、次の週の予定表に反映し、通し時間数の不整合としてあらわれる。したがって、その比較検討によって、「違い」の修正が可能である。

## 四、昭和四十七年度第一学期の国語教室

昭和四十七年の第一学期は、「学習予定表」によると、遅くとも四月八日(土)に始まり、七月二十日(木)の修業式で終わっている。

また、第一学期の大村国語教室(A・B・C・D・Eの五クラス)は、次のような週間時間割にもとづいて展開している。

		曜日						時間
土	金	木	水	火	月	日		
			E	E			1	
	C	A	E	C	B		2	
D	B	A		C	B		3	
D			B	D	A		4	
	A	E	D				5	
		C					6	

各クラスの週間授業時数は四時間である。一学期間(全十五週)の総授業時数は、臨時の休日、定期の行事、大村はま先生の出張等によって、一定ではなく、クラス毎に次のような異同がある。

- ・ A組—48時間
- ・ B組—50時間
- ・ C組—51時間
- ・ D組—46時間
- ・ E組—50時間

したがって、学習内容の展開をたどるばあい、このクラス間の時数差(最高は、C—D組間の五時間)を考慮する必要がある。本稿では、クラスごとの展開をふまえたうえで、それを総合した結果のみを示すことにする。

昭和四十七年第一学期(全十五週)の国語学習は、週ごとに次のように展開している。

第1週(4月10日～4月15日)

○ 学習記録を書く。

○ 話し合い

○ 読書の習慣をつける。

第2週(4月17日～4月22日)

① いきいきと話す、人の前で話すことの練習

② 学習記録の書き方

③ 話を聞いて、要点を書く。(A・C・D)

④ 読書日記(B・C・D)

⑤ 作文の題材集め

⑥ 話し合いのしかた

⑦ 教科書を見る。(A・B・C)

第3週(4月24日～4月29日)

① 作文「ほんとうにそうだなあ」(A・C・D・E)

② 話し合いのしかた

③ 作文「私が見たこと・感じたこと」(A・B・C・E)

④ 暗誦(B・C・E)

⑤ 発表会の準備・練習(B・Cのみ)

第4週(5月1日～5月6日)

① 話し合いの練習

② 話し合いの準備

③ 話し合い

④ 発表(A・B・C)

第5週(5月8日～5月13日)

① 発表会 (グループ別)

② 発表会評 (手紙も利用)

③ 辞書の紹介と活用 (D次週)

④ 「読みたい本」目録の見方 (Bのみ)

⑤ 「ひばりの子」を読む。(Bのみ)

第6週 (5月15日～5月20日)

① 復習テストの準備

② 辞書を選ぶ。

③ 辞書を学ぶ。

④ ことばの問題 (発表会から)

⑤ 放送を聞く。(A・B・E)

⑥ 読みたい本をさがす。(A・B・C・E)

⑦ お話 (B・D・E)

⑧ 学習記録のまとめ (A・D次週)

第7週 (5月22日～5月27日)

① テスト (国語は各クラスとも23日)

② 記録まとめ (記録まとめ週間)

③ 漢字教室 (Eのみ)

第8週 (5月29日～6月3日)

① テストの批評

② 単元名・あとがき・奥付のこと。

③ 読書生活の記録をとじること。

④ 次の学習の準備

⑤ 読書 (自習) (C・D・E)

(学習記録)

第9週 (6月3日～6月10日)

• この週、「国語教室通信」そのものを欠く。但し、号数はそのまま次週に連続する。ここから号数と週数が一つずれることになる。

第10週 (6月12日～6月17日)

① 読書日記の発表

② 読書ノートの書き方(1)「海洋の開発」で (C・D・E)

③ 読書ノートの書き方(2)「ひばりの子」で

④ 本の紹介 (A・D・E)

⑤ 「新しく覚えたことば」の書き方

⑥ 切り抜きのページ (A・C・D・E)

⑦ 学習記録の「目次」や「あとがき」 (Bのみ)

⑧ 「ことば」の学習 (C・D・E)

第11週 (6月19日～6月24日)

① クラスごと、各自の学習

② 目次についての勉強

③ 読書生活の記録 (各自で)

第12週 (6月26日～7月1日)

① 各自で「予定計画表」をたて、自主的に学習を進める。

② テスト (国語は各クラスとも29日)

第13週 (7月3日～7月8日)

① 各自の計画で学習を進める。

② テスト評

③ 「分類」による話し合い



右の表に明らかかなように、昭和四十七年度第一学期の国語教室は、大きく三つの時期に分かれて展開している。

### 第一期（第1週～第5週）

- ・話すことの学習
- ・聞くことの学習
- 話し合い・発表会

### 第二期（第7週～第11週）

- ・学習記録
- ・読書生活の記録

### 第三期（第12週～第14週）

- ・自主的計画的な学習と研究

さらに、第5・6週の「辞書の学習」を、第三期への準備・導入とみると、第一学期の大村国語教室は、

- ① 話すこと・聞くことの学習（五週間）
- ② 学習記録・読書生活の記録（五週間）
- ③ 自主的計画的な学習と研究（五週間）

の過程を正確にたどりながら、展開しているということが出来る。

この第一学期は、学習準備期、中学校三年間の国語学習への導入期として計画されている。そして、その国語学習は、学習者が主体的に学習に取り組む「実の場」として構想されている。したがって、この①～③の過程は、③への発展の過程として、次の構造のもとに理解される。

- (1) 基礎的学習の段階
- (2) 中核的学習の段階
- (3) 発展的学習の段階

この構造の背景に、西尾実氏の言語生活の体系（地盤—発展—完成の三段階）を想定するのは容易であるが、そのことは本稿の課題ではない。本稿の主眼は、大村国語教室の構造とその展開の過程を明らかにすることにある。以上の考察によって、大村国語教室は、

#### I 基礎—話し聞くことの学習

II 中核—書き読むこと（学習記録・読書生活の記録として）の学習

#### III 発展—自主的計画的な学習と研究

の構造を持しながら、その継時的発展的な過程として展開したものととらえることができるのである。

この準備期・導入期をもとに、第二学期以降は、各単元を主題とした総合的な学習が、学習者ひとりひとりの主体性と計画に基づいて組織される。そこには、第一学期の準備期・入門期の指導が着実に息づき、より発展したものととして実現されている。

### 六、国語科授業の構想と展開

国語科の授業を、一定期間におよぶ見通しのもとに構想し、計画し、組織するのは、容易なことではない。

一時間単位・一単元ごとの、比較的短期間の国語科授業は、その時その場に即した指導者の観察力と判断力—学習者の関心や問題意識の把握と教材の選択と見きわめ—によって成立する。学習者とのふれあいや教材の適格性を軽視した授業が、学習者の意欲や情熱を喚起し、学習活動への主体的な取り組みを形成するはずはない。

しかし、学習者・教材との接点を重視する国語科授業は、ともし

れば近視眼的な内容に終始しやすい。そこに、学習者の主体性と学力の育成を見通した、長期的な授業構想力が要請される。

昭和四十七年度第一期の実践に見いだされる大村国語教室の構造と展開は、一時間単位・単元ごとの国語科授業に、一本の確かな筋を通したものと見えよう。国語科の授業は、学習者・教材に即応しつつ、しかも、その時その場に生じる多岐にわたる方向に流されないで、一学期間の授業構想、一年間の学習計画、さらには、入学から卒業にいたる六年間や三年間の長期にわたる見通しに基づいて、学習者の成長と発達を的確にはかっていき、成果として収斂されることが望まれる。それは、国語科の教師として気の遠くなるような課題であるが、それだけに、国語科授業のありようをしっかりと見すえ、その構想と実現に取り組まなければならない。

## おわりに

大村はま先生の「国語教室通信」の「学習予定表」をたどることによって、昭和四十九年度第一期の大村国語教室の実践に、

### I 基礎―話し聞くことの学習

### II 中核―書き読むこと（学習記録・読書生活の記録）の学習

### III 発展―自主的計画的な学習と研究

の構造を見だし、その展開の過程をとらえることができた。しかし、これは、あくまで、大村国語教室の基本構造ともいふべきものである。実際の大村国語教室は、即時的な多様性を包摂しながら、ゆたかな流れとして展開されていた。

なお、今後さらに、次の課題を明らかにしてゆく必要がある。

① 昭和四十七年から昭和四十九年にいたる三年間の大村国語教室の構造と展開

② その三年間の、学習内容と学習材料（資料）の実態

③ 大村国語教室の学習成果としての学習記録・読書生活の記録にあらわれた学習者の成長と発達の過程

④ 「国語教室通信」の記事の内容と実際の学習内容との関係

⑤ 大村国語教室における話し聞くことの学習の位置と意義

⑥ 大村国語教室における自主性・主体性の形成

このうち、⑤⑥の課題は、大村はま先生の単元学習のありかたにかかわって重要である。それは、さらに、表現・理解関連学習の発展した形態であることによって、「関連」のありかたに貴重な示唆を与えるものである。

## 参考文献・資料

- 1 『国語教室通信』大村はま先生著、昭和五十五年三月十日、共文社刊
- 2 『大村はま先生 教職五十年の歩み』大村はま先生教職五十年記念行事実行委員会編、昭和五十二年十一月一日、同委員会発行
- 3 『私の単元学習の歩み メモ』大村はま先生著、昭和五十五年五月三日、大村はま先生退職記念講演会発行
- 4 『「実の場」の構成―本気で学習に取り組ませる指導計画を―』大村はま先生講演記録、『国語通信』（第61号）所収、昭和三十八年八月十日、筑摩書房発行
- 5 『学習集団化への基礎訓練』野地潤家先生稿、『国語科授業論』（野地潤家先生著）所収、昭和五十一年六月一日、共文社刊（本学大学院教育学研究科）